日米の認知的社会化過程における性別化

東京女子大学 柏 木 恵 子¹

東 京 大 学 東 洋

Sex-typing in the cognitive socialization processes in Japan and the U.S.

Keiko Kashiwagi (*Department of Psychology, Tokyo Woman's Christian University, Suganami-ku, Tokyo 167*) and Hiroshi Azuma (*Department of Instruction and Curriculum, Faculty of Education, University of Tokyo, Bunkyo-ku, Tokyo 113*)

In order to investigate the influence of socializing agents upon cognitive development in different cultural contexts, 140 mother-child pairs sampled from an urban population in Japan and a suburban population in California have been studied for four years since 1972. The relationships between maternal factors, such as mother's attitudes and opinions concerning the child-rearing practices, teaching styles, communication styles, mother-child interaction patterns, and child's cognitive performances such as the school-related skills, and IQ were examined for boys and girls separately, and sex differences were analysed concerning the cognitive socialization processes in two countries. Main results are as follows: Sex differences were recognized in cognitive socialization processes in Japan and the U.S. However, the pictures of sex-typing were different in the two countries. In Japan, the characteristics of cognitive socialization in boys were found more clearly than in girls, and much more maternal factors were recognized to be positively related to child's cognitive performances in the boys' group. On the other hand, in the U.S., the characteristics of cognitive socialization were found clearly in both sexes, but they were contrasted and clearly differentiated between the two sexes.

Key words: socialization, sex-typing, cognitive development, cross-national comparison, Japan-United States comparison, maternal-variable.

1972 年から約 4 年にわたって行われた日米幼児教育研究²は、就学前幼児の知的発達に家庭及び母親を中心とする環境諸要因がいかなる規定性をもつか、そこに日米の文化差がいかに関与しているかに焦点をおき、認知的社会化の様相を比較文化的視点から明らかにしてきた。そこでの検討の焦点は子どもの知的発達と母親・環境諸要因間の関係パタンの日米比較におかれたこと、サンプル数も十分大きくないことから、主分析は男女合計のデータにもとづいて行った。しかしその分析・検討過程で子どもの性別による差異が各所で示唆されたことから、

結論するには十分なサンプル数ではないにもかかわらず、既に提出した研究成果や結論（東・柏木・ヘス、1981）が男女児に等しく該当するか否か、そこにも日米差があるか否かをここで概括的に検討する。性別化は極めて幼少時に始まり、特に母親の子どもへの期待・行動に性別による差異がある事実が内外で既に明らかにされており（Maccoby & Jacklin, 1974；津留, 1970）、この性別化の様相はそれぞれの文化の特質を反映する、まさに社会化そのものであることを考えると、比較文化的研究として性差の検討は無視できないと考えたからである。

方 法

さまざまな社会階層にわたる日米の母子を対象に、子どもが 3:8 歳から 6:0 歳までの期間に、子どもの知的発達を測定する諸テスト、母親の養育態度・教育観を測定する面接・質問紙、母親の教授スタイル・コミュニケーション

¹ 本論文の作成にあたりデータ計算について助力して下さった、東京大学教育学部中沢保生氏に謝意を表します。

² 本研究は、米国側は Stanford 大学 R.D. Hess 教授、日本側は東京大学東洋教授を代表とし、Spencer 財団、日本学術振興会、文部省科学研究費、ESSO 財団等の援助により実施された。

Table 1
Correlation between cognitive measures and scores of behavioral characteristics
for boys', girls' and combined groups in Japan and the U.S.

J/U.S.

Group	Behavioral characteristics Cognitive measures	Impulsivity	Originality	Activity	Dependency	Persistence
Combined	school-related skills at 5:0	-.25* -.14	-.10 .31**	.11 .36**	-.05 .06	.26* .21*
	I. Q. at 6:0	-.32** -.08	.03 .29**	.17 .16	-.13 .12	.25* .05
Boys	school-related skills at 5:0	-.25 .03	-.23 .22	.24 .30*	-.17 .14	.22 .03
	I. Q. at 6:0	-.22 .32*	.03 .29*	.22 .06	-.29 .25	.10 -.29*
Girls	school-related skills at 5:0	-.33* -.28	.02 .38*	-.04 .40**	.02 -.05	.31* .37*
	I. Q. at 6:0	-.46** -.39**	.18 .30*	.11 .24	.00 -.09	.47** .34*

* $p < .05$ ** $p < .01$

ジョンスタイル・母子相互交渉パターンを観察測定する母子実験等を日米並行して追跡的に実施した。最終分析の対象となった母子サンプルは日本 58, 米国 66 で, 本報告はこのうちほぼ半数ずつを占める男女別の分析資料にもとづく。

本研究の分析は主として母親諸変数と子どもの知的発達諸測定間のピアソン積率相関によったが, ここでも同様の処理・分析を男女別に行い比較検討する。ただし多数の知的測度のうち 5 歳時学力 (文字読み書き及び計算・加算等などのテスト総合得点) 及び 6 歳時 IQ の 2 測定にしばり, これと母子実験場面で観察・評定された 5 行動特徴³ との関係を検討した上で, 知的測定と母親諸変数との関係, さらに母親変数に関する性差も検討し, 日米の認知的社会化過程における性別化について概観する。

³ 各特徴の内容を評定尺度によって示す。() は逆の極。

1. 衝動性: 考えるより先に行動をおこす (⇔考えてから行動する, 抑制的・内省的)。
2. 独創性: 新しい観点からみ, 自分で考え工夫して独自のものを作る (⇔モデルの模倣, 母親の指示に従う)。
3. 活動性: 課題に積極的にとり組み楽しむ (⇔乗気でなくつまらなそう)。
4. 依存性: 母親に助力・保護を求め, その指示に従う (⇔自力で試み, 母親からの影響少ない)。
5. 持続性: 一旦始めた活動に長時間興味が持続し執拗で着実 (⇔興味がすぐ変り行動の変換早い)。

結 果

子どもの知的測定における性差及びその構造

2 知的測度の性差の有無を, 性との相関により概観したところ, 6 歳時 IQ に米国で低い負相関 (男児の方が高い) があるほかは日米いずれでも無相関で性差はないとみなしうる。また 2 測定ともその平均得点には日米差はなく, 日米サンプルの知的発達水準はほぼ等しいとみてよい。

ところで, この知的測定と行動特徴との相関パターンには著しい日米差があり (Table 1), 知的発達が日米で異なる行動特徴と結びついていることが明らかにされている。すなわち, 男女合計の相関から, 日本では抑制的・内省的で辛抱強く努力することが, 他方米国では個性的にまた積極的に活動することが, それぞれ知的発達と関係しており, その背景をなしていることが示唆される。この日米の差異・対照は, それぞれの文化における認知的社会化の特質またそれぞれの社会で望ましい行動とされているものを反映している。

このような日米差に加えてさらに, 性差が日米いずれにもあり, 前述の男女合計の場合とは異なる相関がいくつか認められる。男女両群の相関にどれほど異同があるか, また全体の相関との異同とも対応させながら日米ごとに吟味してみると (Table 2), まず日本全体で知的測定と高く相関していた“衝動性”(負), “持続性”(正) は男女児にほぼ共通しているが, 女児の側でより明確であること, 女児にはこのほかには注目すべき行動特徴との関連はないのに対して, 男児では“独創性”“活動性”

Table 2
Differences and similarities between boys and girls in correlational patterns
(Number of correlations)

Types of sex concordance in the correlations found in Japan and the U.S.		Japan	U. S.
Common to boys and girls	completely†	0	2 (Originality, Activity)
	almost††	2 (Impulsivity, Persistence)	0
Found in only one sex	in boys	3 (Originality, Activity)	1 Dependency
	in girls	0	0
Opposite signs for the two sexes	almost	0	0
	completely	0	2 (Impulsivity, Persistence)

† significant in both sexes.

†† significant in one sex, insignificant but in same tendency in the other sex.

Table 3
Number of significant correlations between child's cognitive measures and maternal variables in Japan and the U.S.

Group	Japan	U. S.
Boys	36	37
Girls	22	36
Combined	37	47

“依存性”がかなりの正相関をもち、これら特徴がその知的発達と関係していることが示唆される。

他方、米国では全体でも高い相関のあった“独創性”“活動性”が男女児いずれでも同様の高い相関が認められ、これらが男女に共通する米国の子どもの認知的社会化的基本的特徴であることを明らかにしている。この共通性のほかに米国では男女児に対照的な相関パターンが極めて明確な形で存在していることも注目される。それは“衝動性”：男児で（正）、女児で（負），“持続性”：男児で（負）、女児で（正）というもので、この2特徴が男児と女児とではその知的達成と正反対の関係、異なる意味をもっていることを示している。

以上のことから、認知的社会化過程には日米いずれでも性差があるが、概して日本の方に性差が大きく、また男児が女児に比べてより多くの行動特徴との結びつきがあって、その性格がより明確であること、米国では子どもの性別を問わず認知的社会化に共通した特徴がある一方、それぞれの性に固有で相互に対照的な特徴もあり、男女児の社会化過程がともに明確な形で分化しているといえよう。このことは、日本では女性役割が男性役割に比し概して曖昧で不明確であるという知見（柏木、1967）とも通ずるものとして興味深い。

もう一点注目されることは、米国の女児固有の特徴が

日本の女児（男児）のそれと極めて近似していることである。“衝動性”（負），“持続性”（正）の相関パターンがそれで、抑制的・内省的で、一つことを持続的に着実にとり組むといったことが、日米を通じて女児の知的発達の背景をなす要因であること、さらに日米両文化を通じて女性役割特性の一部をなしていることを示唆している。

母親変数と子ども変数との関係における性差

ここでは、母親のいかなる特性が子どもの発達にどのような影響をもつかという内容には立入らない。（この点については東他（1981）に詳述）基準変数（子の知的測度）と予測変数（母親の態度・行動諸変数）間の関係の強さ及び相関の異同について、日米それぞれにおける男女両群の比較に焦点をあて、両変数間の関係パターンにおける性差を量的な面から巨視的に検討する。

教育観（22）、しつけ方略（9）、教授スタイル（19）、母子相互交渉パターン（17）、コミュニケーション・スタイル（17）の総計 84 母親変数を予測変数とし、2 知的測度（5 歳時学力、6 歳時 IQ）を基準変数とした男女合計、男女別の相関マトリックスにおける危険率 5% 以下の有意相関数は Table 3 の通りである。米国では男女にほぼ同数の有意相関があり、母親要因と知的発達との関係が少なくとも量的な面では男女ほぼ等しいといえる。これに対して日本では男児には米国の男女児にほぼ等しい相関数があるが女児ではこれらをかなり下廻り、知的発達に対する母親要因の関係が女児では男児に比してより稀薄であることが示唆される⁴。

今とりあげた有意相関に加えて、相関の大きさ及び方

⁴ このことは、今の 2 測度に、3 歳時言語理解、4・5・6 歳時形態認知、6 歳時学力の 3 測度も加えて母親諸変数との相関を検討した結果（日本で男児:75、女児:49、米国で男児:73、女児:86 の有意相関数）でも、ほぼ同様である。

Table 4

Number of significant correlations between child's cognitive measures and maternal variables in Japan and the U.S.
(Number of correlations)

	Japan	U. S.
Common to both boys' and girls' groups	27	42
Found in only one sex	14	12
Opposite sign for the two sexes	21	17

Table 5

Content of correlations which are significant or higher in one sex group
(Number of correlations)

	Japan	U. S.
Significant or higher in boys' group	28	22
Significant or higher in girls' group	14	22
Total	42	44

Table 7

Maternal variables significantly correlated to sex in Japan and the U.S.

Japan	(U.S.)	U. S.	(Japan)
Verbal environment	-.24* (.03)	Emphasis on social development	-.24* (-.20)
Prediction	-.45** (.09)	Positive affection	.21* (-.20)
Varieties of orientation	-.22* (.09)	No feedback	-.22* (-.09)
Rule (control strategy)	.30* (-.36)**	Structured overviewing	.25* (.15)
		Degree of structured overview	.26* (.17)
		Proposition	.25* (-.12)
		Rule (control strategy)	-.36** (.30)*
		Questioning the reason	.23* (-.13)

向を考慮して男女両群の相関の異同を吟味・分類してみると (Table 4), 母親変数と子どもの知的測度間の関係における性差が, 日本でより大きいことは一層明らかである。米国では男女に共通する相関は日本よりかなり上廻り, 逆に日本では同一の母親変数が子の測度と相反する相関をもつケースが米国を上廻る。さらに一方の性のみに認められる相関も日本の方にやや多い。

次に一方の性のみで有意あるいは顕著な相関についてその内訳をみると (Table 5), 総数は日本 42, 米国 44 と大差がないのに, その性別分布は日米で明らかに異なり, 米国ではその半数が男女両群に分れているのに対して, 日本では男児の方にかなり偏り, 男児だけに存在する相関が極めて多いのである。

以上のことから, 母親要因と子どもの知的測度間の関

係・パタンの性差は日本の方に著しく, しかも男児の方で母親要因がその知的発達に対してより深い関係をもつ。これに対して米国では少くとも相関数に関する限り, 性差は小さく母親要因と知的発達の関係の強さは男女ほぼ等しいといえよう⁵。

母親変数における性差

子どもの知的測度との関係に性差が少なからず認められた母親変数そのものに, 子どもの性別による差があるかを性との相関⁶により検した結果, 全 84 変数中日本で 4, 米国で 8 の変数に性との有意相関が得られている。この数からは日本よりも米国の方で母親の態度・行動に性別化が大きいかに見えるが, 相関内容をみると必ずしもそう単純ではない (Table 7)。日本での 4 変数中 3 変数は性と負相関つまり男児の方でその母親特性は大

Table 6

Number of significant correlations between maternal teaching-styles' variables and child's cognitive measures in boys and girls groups in two countries

	Japan	U. S.
Boys	6	6
Girls	0	7

⁵ このような性差に関して日米差の最も著しいものとして母親の教育スタイル変数がある。日本では全体の分析で高い正・負の相関を示し, 知的発達に有意な役割をもつとみなされたものが, 男女別にみると男児群だけにその相関が認められ, 女児ではそれは消えてしまう。このような性差は米国ではみられない。教授スタイルのある変数は男児で, 別な変数は女児でという風に, それぞれの知的発達に母親の教授スタイルはその内容は異なれ, 偏りなく相関しており, 教授スタイルはほぼ同程度の重要性をもっている (Table 6)。

⁶ 男: 1, 女: 2 とコードし, それと各変数との積極率相関。

で、それら3変数:“言語環境の豊かさ”(verbal environment)“将来期待”(prediction)教授スタイルでの“方向づけの多様さ”(varieties of orientation)は、いずれも子どもの知的測度と正相関していることが確かめられているが、そうした母親要因が男児の方により多く与えられていることになる。これに対して女児の方で高い唯一の変数“ルール”(rule)を用いるしつけ方略は、日本では知的測度と明確な関係をもたない変数なのである。このように子どもの知的測度に正に関係する働きかけを男児の方が母親からより多くうけていることは、さきに知的測度と母親変数との相関が、日本では男児の方により多く存在していたこととも対応するものであろう。

米国での8変数中負相関つまり男児にその得点が高い変数は3、逆に正相関で女児で得点大の変数は5である。このうち“情緒的受容傾向”(positive affection)“理由の質問”(question of the reason)以外の変数は全て子どもの知的測度と正相関しているので、日本の場合のように、知的発達に正に関係するような働きかけを母親が一方の性(男児)だけに偏して多く与えてはおらず、むしろ子の性別によってそれぞれ内容の異なる態度・行動をとっているといえる。これは、日本での子どもの知的発達に關係する母親の働きかけが男児に偏り、女児ではこれが稀薄であったのとは異なり、米国では性別に応じて母親の態度・行動が分化していることを裏づけるものであろう。このことは、前節で日本が男児についての認知的社会化がより明確であるのに女児のそれはより曖昧であったが、米国では男女児それぞれが別個の対照的な特徴をもっていたこととも符合するものであろう。

なお、ここで性差のある母親変数に日米共通するものが全くない事実は、日米いずれでも母親の態度・行動に性別化があるものの、その内容はかなり異ったものであることを示唆している。両国で性との相関のある唯一の変数“ルール”が日米で正負と逆の相関であることもそ

の端的なあらわれとみなせよう。

結 語

以上、明らかにされたのは次の諸点である。

1. 認知的社会化の過程には日米いずれにも性差があり、性別化(sex-typing)が示唆される。
2. 日本では男児においてそれがより明確であるのに対して、女児ではより曖昧である。これに比して米国では男女児の認知的社会化の特徴がそれぞれ明確で、相互に対照的な形で分化している。
3. 母親の態度・行動及びそれらと子どもの知的発達との関係パターンにも、日米いずれでも性差があるが、その内容は両国で異なる。
4. 日本では知的発達と正に関係する母親要因が男児に偏している。また母親要因と子どもの知的発達間の関係パターンに男女共通する部分がより少なく、性ごとに異なることが多い。
5. これに対して米国では母親要因と子どもの知的発達間の関係が男女に共通する部分がより多い上、母親要因そのものも一方の性に偏しておらず、男女児それぞれに別個な面で関係が認められ、子どもの性別に応じて母親は明確に分化した態度・行動をとっている。

引 用 文 献

- 東 洋・柏木恵子・ヘス R. D. 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達——日米比較研究——東京大学出版会
- 柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究, 15, 193-202.
- Maccoby, E. E., & Jacklin, C. N. 1974 *The psychology of sex differences*. Stanford University Press.
- 津留 宏 1970 性差心理学 朝倉書店

——1981. 1. 19. 受稿, 1981. 3. 28. 受理——